

アリスタ IPM 通信 第32号

IPM 技術の普及や弊社製品をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。

今年度は農業に関わる政策上の方針が大きく変更される年となりました。

政治的な思惑や国際情勢に伴う強制的な変化に対して、一企業として直接的にできることは限られています。

一方、我々はその変更を見定め、適切な情報や製品の提供によって農業がより良く適応できるお手伝いのできればと願っています。

今後も IPM 通信や各地の営業員を通じて、皆様に有用な情報提供をしていきたいと考えていますのでご期待いただきたくよろしくお願いいたします。

アリスタ ライフサイエンス(株) マーケティング部 原 荘太

<目次>

お知らせ	P.2
特集 1 施設園芸作経営でのIPM技術の全体的評価について考えてみよう	P.4
特集 2 天敵利用者のイチゴの春先のアザミウマ類防除について	P.7
特集 3 半促成栽培 施設果菜類のスワルスキー®放飼前後の注意点	P.10
特集 4 新しい農業と「バイオスティミュラント」の必要性について(1)	P.13
特集 5 マルハナバチの利用方針に関する政府の正式発表と助成事業について	P.15
〈海外ニュース〉	P.17
さいごに	P.18

<お知らせ>

☆ お見逃しなく！ 2つのキャンペーンをご案内致します。

現在、弊社では、2つのキャンペーンを実施中です。どしどしご応募ください。

● これからが撒き時！ 殺虫剤 オルトラン®粒剤 3kg (1袋) と 専用計量スプーンをプレゼント！

オルトラン®粒剤 40周年モニターキャンペーン web 限定申込 5月中旬応募締切

[オルトラン®粒剤 40周年モニターキャンペーン 詳細はこちらをクリック](#)

● 受粉用マルハナバチ ナチュポール®シリーズ 25周年記念。製品を買ってスタンドをもらおう！

毎月 88 名様に、ナチュポールを置くのに最適で便利なスタンドが当たります。

ナチュポール® 25周年ありがとうキャンペーン 製品同梱ハガキにてご応募 10月末日消印まで有効

[ナチュポール® 25周年ありがとうキャンペーン 詳細はこちらをクリック](#)

○植物由来成分入りハーモザイム®が1本もらえる「ハーモザイム® ゲットキャンペーン」は、お陰様で終了いたしました。皆様のご応募、どうもありがとうございました！

☆ 五月は ハマキ天敵 の利用タイミングです！

チャハマキ、チャノコカクモンハマキだけに感染する選択性の高い殺虫剤です。
輸出用のお茶などで農薬残留が問題となる茶畑での利用が進んでいます。

抵抗性がつきにくいバイオの昆虫ウイルス製剤です。

散布はできるだけ、紫外線の強くない夕方などに実施してください。

感染してから、ハマキムシが死亡するまでは温度にもよりますが、20日程度かかります。

次世代以降の葉巻が減ってくるという残留基準の問題のない殺虫剤です。

なお、リンゴのコカクモンハマキにも登録がありますので、リンゴにもご利用ください。



☆ ゴールデンウィーク中に オルトラン®粒剤を！

4月から5月は、アブラムシなどの害虫がバラの芽と葉に大発生します。

放っておくと大切なバラが傷つけられてしまいます。

そこで、オルトラン®粒剤の出番です！

オルトラン®粒剤は、株元に撒くだけで簡単にバラにつくイバラヒゲナガアブラムシなどのアブラムシ類を防除できます。

尚、処理後に灌水をすると、より効果が早くです。

この機会に是非、お試しください。





☆ 「アриста IPM 通信」のご意見やご感想をお待ちしております！

弊社 HP 内に、IPM 通信のご意見やご感想を簡単にご入力いただけるフォームを作成致しましたので、この機会に是非、みなさんのご意見やご感想をお聞かせください！



[「IPM 通信」についてのご意見・ご要望・ご感想などはこちらクリック](#)

または、www.arystalifescience.jp/ipm/ipmtsushin.php にアクセスお願いします。



「IPM通信」は、主に天敵農薬に関する情報を定期的にお届けしています。
配信をご希望の方は、下記の入力フォームから必要事項を送信してください。
※ 後ほど、ログインする際のIDとパスワードをお送りします。

 [配信希望 入力フォーム](#) 

「IPM通信」についてのご意見・ご要望・ご感想などを是非お願いします。

 [ご意見・ご要望・ご感想など](#) 

※ログインとパスワードを既にお持ちの方は、下記よりログインしてください。

 [IPM通信へのログインはこちら](#) 

<特集>

1. 施設園芸作経営でのIPM技術の全体的評価について考えてみよう。

熊本フィールドアドバイザー 荒木 均

2017年3月「全国農業システム化研究会・IPM実証調査最終成績検討会」が東京で開催され、全国から普及指導員の皆さんを中心に130人以上の参加があり、各県の実証成果報告と熱心な意見交換が行われた。

この研究会は11年目を迎えるが、これまでの実証成果などから、ナス・キュウリ・ピーマン・イチゴ、メロンなどの施設園芸作では、天敵利用を中心にIPM技術がメジャーなものとして定着してきている。

ただ、この成績検討会では、費用対効果として「市販天敵利用で農薬費を中心にランニングコストが高くなる」といつも指摘される。そのたびに、IPM技術は単なるコスト評価でなく、経営全体からの相対的なメリットを考える必要があると感じており、私なりに「IPM技術が経営全体に及ぼす相対的な評価」について4つの視点で提案してみたい。

1. 化学農薬費・ランニングコストの削減

熊本でも、IPM技術をうまく利用すれば、害虫防除の回数を大幅に削減し、農薬費の節減につながっている事例も数多くみられ、JA部会ぐるみで取り組む事例も多く見られている。

例えば、促成キュウリでは、一般的にアザミウマ・コナジラミ類の防除に困り、春先には、約10日間隔で農薬散布するといった事例も見られた。

IPMに取り組むことで、天敵(スワルスキー)放飼後、対象害虫防除のための農薬散布が殆どなくなり、アブラムシ等はレスキュー防除(天敵にやさしい農薬)として1~2回程度で済み、市販天敵費を入れても農薬費が1/3程度になるなどの成果があがっている。

ただ、IPM技術の導入経験が浅いと、①これまでの習慣で、つい予防防除的に殺虫剤を使いすぎる。②天敵が確認できず、不安になり殺菌剤の散布時に殺虫剤も混用してしまう。③コナジラミなどがわずかでも飛んでいれば防除したがる。などから農薬費が高くなる傾向がある。

A.定植後早めの放飼 B.ゼロ放飼防除の徹底(放飼前に強い農薬で害虫密度を減らす) C.放飼後は、管理作業とあわせて天敵・害虫密度観察の徹底 D.害虫密度に応じたレスキュー防除(天敵にやさしい農薬散布)というポイントを抑え、少しの農薬散布の我慢をすれば成功間違いないと考えている。

2. 農薬散布作業の省力化と安心防除

一昨年、熊本のイチゴでは「ナミハダニが多発し、殺ダニ剤を散布してもリサージェンスで農薬が効かない。」「葉が繁茂し農薬が葉裏にかからずハダニが増える」「歳を取って農薬散布はもう限界」と、駆け込み寺的に天敵利用が増え始めた。

ハダニが増え始めると、農家では一週間に一回程度、殺ダニ剤から気門封鎖剤まで大量に散布し、「今度は効いてくれ」と嘆かれる。

天敵を放飼することで「農薬散布で死ななかったハダニを捕食」「ハダニ密度を恒常的に抑制する」しかも「殺ダニ剤の使用回数が少なくなることで殺ダニ剤の感受性が高まり予想以上の効果を発揮する」といった効果を各地域で観察できた。

イチゴ作のハダニ防除は、定植後のスパイカル EX(ミヤコカブリダニ)、スパイデックス(チリカブリダニ)の同時放飼、ハダニ発生初期の殺ダニ剤などでのレスキュー防除、スパイデックスの追加放飼といった天敵と化

学農薬との組み合わせで、天敵放飼後は殺ダニ剤の散布 1～2 回と気門封鎖剤のスポット散布で済んだという声を多数聞くことができた。

定植後の天敵導入費・春先の追加放飼の経費は高く見えても「何よりもハダニに悩まなくて良い、天敵が毎日ハダニを捕食しているといった安心防除」につながっている。

イチゴ農家の 3～4 月は、収穫、箱詰め等で深夜まで作業が続き「猫の手も借りたい」時、少しコストが高くなっても、農薬散布作業が減ることは省力化につながり、まさに、願ったりかなったりである。

3. 生産技術と経営改善への寄与

一般的にウリ科作物では、天敵(スワルスキー)がアザミウマ・コナジラミ類を捕食することで、これら害虫が媒介する黄化えそ病や退緑黄化病などのウイルス病の発生が大変少なくなり、収穫期間の延長など、生産技術の改善に大いに寄与することが知られている。

例えば、熊本で 7 月下旬から 12 月まで収穫する抑制キュウリ作では、定植時から害虫が多く、黄化えそや褐斑病なども発生し、10 月下旬には収穫を断念するハウスなども見られたが、褐斑病・うどんこ病、べと病等の耐病性品種とスワルスキー効果などで、殆ど病気の発生もなく 12 月までの収穫を可能にしている。

また、促成ナスでは、天敵放飼後、レスキュー防除を行うことで、交配作業にクロマルハナバチなどの訪花性昆虫の導入も可能となる。

ちなみに、促成ナスでは、9 月から翌年 6 月まで、栽培管理に 1,500 時間/10a を要するが、このうちトマト一の交配作業が約 300 時間を要し、大変な作業の一つとなっている。これらも、IPM 技術の導入により、10 月からハチ交配もできるようになり、余剰労力を規模拡大等に振り向ける農家も見られる。

このように、単なる農薬での病虫害防除を IPM 化することで、収量・品質の向上から経営改善まで図られるのである。

4. 我が家の農業経営理念や目標の確立に向けて

農業者の皆さんは、少しでも環境にやさしい農法で、安全・安心なおいしい農産物を生産し、個人や地域でブランド化を目指した経営の確立に努力されている。

例えば、国の持続農法に基づく、エコファーマー認定制度なども代表する一つの取り組みであろう。

こうした、経営の理念や目標を達成するためにも、IPM 技術はその基礎的なものと考えている。

2020 年に開催される東京オリンピック。

選手の皆さんなどに提供される国産農産物は、GAP(農業生産工程管理)を基準として生産したものであることが求められ、今、農業界挙げて大きな課題となっている。GAP でも、環境に配慮した生産活動が原則となっており、その意味からも IPM 技術の普及を急がなければならない。

施設園芸では、環境制御技術が急速に普及しつつあり、ハウス内の光合成促進をねらいに、CO² 発生装置、制御機器といったイニシャルコストから CO² ガスといったランニングコストまで、新たな初期投資と維持費がかかる。

IPM 技術は、新たな初期投資も殆どいらず基本的にランニングコストだけで済む。

農家や農業指導者の皆さんの意欲と意識の変革で、あなたのハウスに応じたオーダーメイド型の IPM プログラムの組み立てと実践が可能となる。

農薬散布だけではハダニの防除がむずかしいイチゴ



雨よけハウスでの抑制キュウリ、病害虫で 10 月下旬には収穫を断念



スワルスキーと耐病性品種で、11 月でもほとんど黄化なし



促成ナス 4 月後半、ハダニ、アザミウマ、コナジラミが多発し、防除が困難となり収穫を断念したハウス



2. 天敵利用者のイチゴの春先のアザミウマ類防除について

アリスタ ライフサイエンス(株) 里見 純

イチゴでの天敵利用は普及拡大しており、全国的に見ても半数以上の生産者が取り組んでいらっしゃいます。主にハダニ類に対して天敵を利用されていますので、4 月以降になるとハウスサイドを開け始め、ハウス外からアザミウマ成虫の飛び込み量が急増し、春先のアザミウマ防除に苦慮されている方が多いと聞きます。

そこで、アザミウマ類の防除について提案いたします。

飛び込みが増えてくると、どの薬剤を散布してもなかなか減らないという印象を持つ方が多いと思います。やはり飛び込み量を減らすことが重要です。

イチゴハウスでサイドネットを利用されていらっしゃる生産者はそれほど多くないと思いますので、これが飛び込み量の増加を防ぎきれていない一番の要因だと思われます。

しかしながら、この時期からサイドネットを展帳するのは経済的ではありませんし、作業的にも無理があります。

サイドネットを利用されていない方は次年度の定植前にご検討ください。

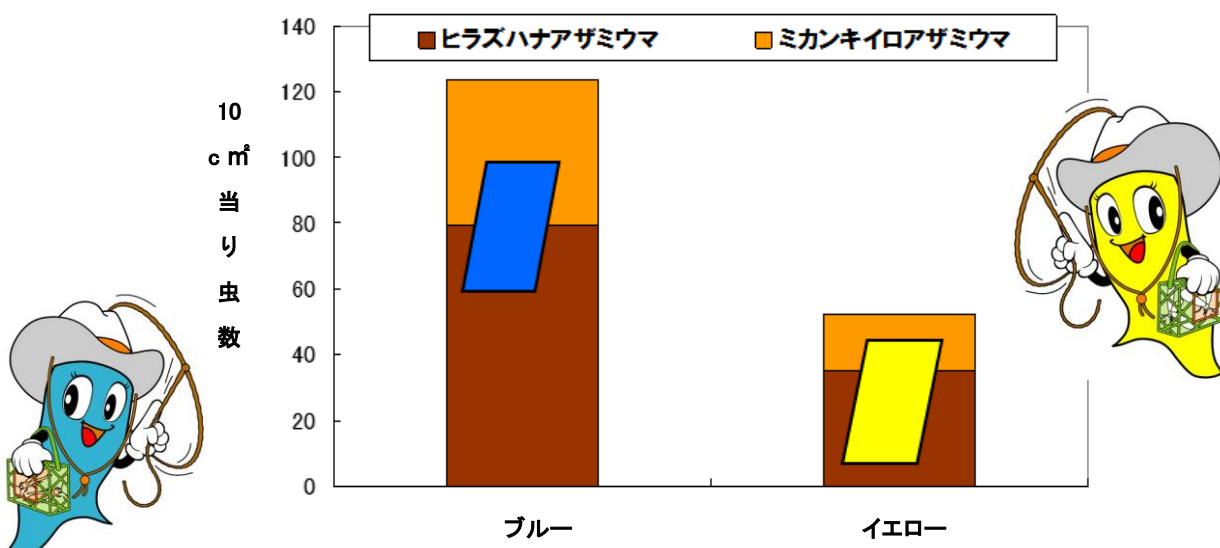
最近では、サンサンネット e-red シリーズ SLR 2700 (0.8mm 目合) と SLR 3200 (0.6mm 目合) の利用が拡大しており、アザミウマ類に対しては有効だと言う報告があります。

また、縦糸も横糸も赤色にした新製品を開発中とのことです。

サイドネットを利用していない場合、飛び込み量を減らすには、粘着トラップの利用が効率的です。

特にイチゴのアザミウマはヒラズハナアザミウマとミカンキイロアザミウマが主体となります。

下記グラフに示すようにホリバー ブルーの方が、捕殺量が多くお勧めです。



グラフ 1. ホリバー ブルーとホリバー イエローのヒラズハナアザミウマとミカンキイロアザミウマに対する捕殺量の違い



写真 1. イチゴハウスに設置したホリバー ブルーに付着したアザミウマ類



写真 2. イチゴでのホリバーの設置例(割り箸を利用)

さて、物理的防除をした後は、化学的防除を行うこととなります。
イチゴのアザミウマ類に対して登録がある薬剤を影響の少ない順に並べてみました(表 1)

表 1. イチゴのアザミウマ(類)[※]に登録がある薬剤とカブリダニに対する影響

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	カブリダニに対する影響	カブリダニに対する影響日数
ポタニガード水和剤	1000 倍	発生初期	—	◎	0 日
ベネビア OD	2000 倍	前日	3 回	◎	0 日
マッチ乳剤	1000～2000 倍	前日	4 回	◎	0 日
カスケード乳剤	4000 倍	前日	3 回	◎	0 日
カウンター乳剤	2000 倍	前日	4 回	◎	0 日
ポタニガード ES	1000 倍	発生初期	—	○	1 日
アタブロン乳剤	2000 倍	前日	3 回	○	14 日
スピノエース顆粒水和剤	5000 倍	前日	2 回	○	14 日
モスピラン顆粒水溶剤	2000 倍	前日	2 回	△	14 日
ディアナ SC	2500～5000 倍	前日	2 回	△	14 日
コテツフロアブル	2000 倍	前日	2 回	×	14 日
ハチハチフロアブル	1000 倍	前日	2 回	×	40 日 ↑
モベントフロアブル	2000 倍	前日	3 回	×	45 日
アーデント水和剤	1000 倍	前日	4 回	×	60 日 ↑
アザミバスター水和剤					

※ミカンキイロアザミウマのみ、ヒラズハナアザミウマのみの登録も含む

ハダニ類の防除対策としてカブリダニ類を利用されているのであれば、是非、この一覧表の上から順番に利用することをお勧めいたします。

すべて利用するということではなく、いつも利用している薬剤を並べた場合、この表の上から順番に使っていただきたいということです。

具体例を以下に示します。



図 1. イチゴで天敵利用している場合の春先からのアザミウマ剤の使用順序の例

最初に述べましたが、4 月以降にサイドネットを開放するとハウス内のアザミウマ数が急増します。

毎年、どんな薬剤を散布しても効かない感じがするのは、飛び込み量が防除圧を上回っているためだと考えられます。

是非、物理的防除を加えた上で化学殺虫剤の利用をお願いいたします。

3. 半促成栽培 施設果菜類のスワルスキー®放飼前後の注意点

アリスタ ライフサイエンス(株) 里見 純

スワルスキーは施設果菜類のアザミウマ・コナジラミ・チャノホコリダニを同時に防除可能な「画期的な天敵」として、発売以来利用面積が拡大しています。

特に半促成栽培の地域では早くからスワルスキーを利用されている方が多く、5年以上利用されている方も少なくありません。

そこで、スワルスキー放飼前後の注意点について、おさらいをしたいと思います。

1. 放飼前の薬剤の影響日数を確認！

放飼前にスワルスキーに影響のある薬剤を散布している場合、その影響日数より間隔が空いているか確認してください。

下記のアリスタ ライフサイエンス社の HP に「天敵等に対する農薬の影響表」が掲載されていますので、ご参照ください。

http://arystalifescience.jp/product/product_index.php

2. ホリバー(粘着板)の設置！

特集 2でもお伝えしましたが、サイドネットを展張していない場合、暖かくなってきてハウスサイドを開放すると害虫がいっせいに飛び込んできます。

開放する前にホリバーの設置してください。

ホリバー イエロー 100枚 + ブルー 100枚/10aを推奨しています。

イエローは、コナジラミ類やアブラムシ類の成虫用、ブルーは、アザミウマ類の成虫用です。



写真 1. ホリバー イエローとブルーのピーマンでの設置状況

3. 放飼後 1~2 週間は葉かき・整枝は控えて！

これは、放飼直後にスワルスキーが産卵を始めるため、この期間に葉かき・整枝をしてしまうと卵や幼虫を圃場から持ち出してしまうことになるからです。

放飼後 2 週間ほどするとスワルスキーはほぼ作物の全体に均一に生息するように分布しますので、こうなれば葉かき・整枝をしても問題ありません。

葉かき・整枝をした場合は、一時的に株元に置いておくようにしてください(写真 2)。

なお、葉や枝に病斑が認められる場合は、病害の発生源になる恐れがあるため、適切に破棄してください。



写真 2. 葉かき後の葉を株元に置いた状況



写真 3. ナスの葉裏の毛耳に産卵されたスワルスキーの卵

4. 放飼後 1～2 週間は薬剤散布を控えて！

スワルスキーは放飼後に、葉裏の毛耳の先に産卵を始めます(写真 3)。

ここに薬散をすると卵が散布圧で吹き飛んでしまったり、生まれたばかりの幼虫に影響があったりします。

5. 放飼後の薬剤散布は影響「◎」の薬剤を中心に！

スワルスキーに対する薬剤の影響表を確認して、なるべく「◎」の薬剤から使用してください。

前ページに掲載した弊社の HP の影響表をご参照ください。

6. 放飼後にスワルスキーが見えやすくなるのは放飼 3 週間後以降から

スワルスキーは、非常に見つけやすい天敵です。

しかし、放飼直後に見つけようとしてもまだ数が少なく、見つけることは難しいです。

スワルスキーがどの葉にも均一に見られるようになるには放飼から 3 週間後以降と考えてください。

作物によって定着量にやや差があり、ピーマンでは 1～3 頭/葉、キュウリでは 2～5 頭/葉、ナスは少なめ 1 頭/葉程度のスワルスキーを観察することができます。



写真 4. ピーマンの葉裏のスワルスキー(葉脈の陰に潜んでいることが多い)

最後に、基本的な注意事項をまとめます。

- ・なるべく全ての株に放飼してください。
- ・地面に落ちないように、水平な葉の上にやさしく乗せてください。
- ・放飼途中で足りなくならないよう注意してください。

① 放飼前

スワルスキーカブリダニは容器内に偏在しています。
放飼前に容器を10分程横向きに静置します(写真5)。
放飼直前にゆっくり10回転させて、スワルスキーカブリダニが均一になるようにしてから放飼します。



写真5. 放飼前に横にして静置してください。
(ずっと持っていなくても置いておけば大丈夫です)

② 放飼準備

- 減り具合をチェックできるようにマジック等でボトル側面に4等分程度の目盛り線を書きます。
- 指で蓋の真ん中にある切り込み線の入った小窓部を押します。
- 蓋を空け、小窓片を完全に取り除きます。
- 小窓の開いた蓋をボトルに取り付けて放飼します。



i) ボトルの側面に
線を引きます。



ii) 上から指で小窓を
押します。



iii) 内側から小窓片を
取ります。



iv) 小窓の開いた蓋を
戻します。

③ 放飼方法

- 一振りずつ、なるべく全ての株に放飼します。
- 地面に落ちないように葉の上に乗せてください。
- 10a 当り 2~3本が目安です。
- 放飼穴(小窓)が小さいため、約350~400回振ることができます。
- 栽植本数が多い場合は振る力を加減して回数を増やしてください(約500回まで可能)。
- 最初は少なめに、余ったら害虫の発生が多い場所に重点的に振ってください。
- ボトルを横にして指で叩くようにすると少量の放飼が可能です。



写真6. スワルスキーボトルの蓋



以上、スワルスキーの放飼前後の注意点をよく守って、スワルスキーの定着を向上させ、スワルスキーをハウス内で飼育しているかのように上手に使っていただけると幸いです。

4. 新しい農業と「バイオスティミュラント」の必要性について(1)

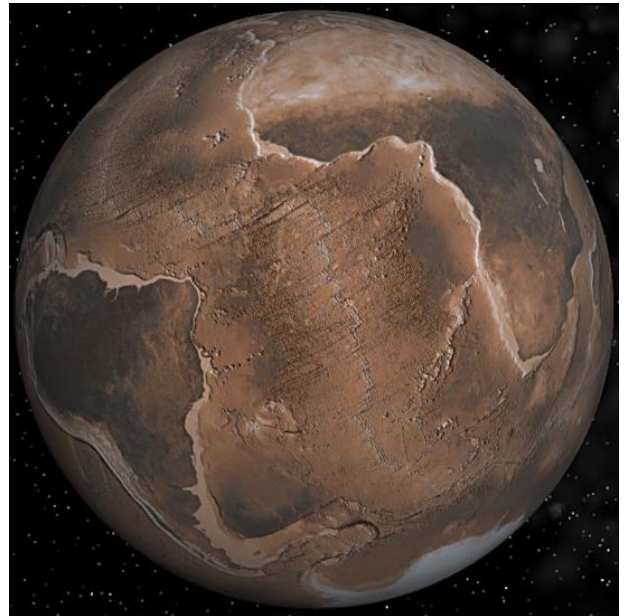
アリスタ ライフサイエンス(株) 須藤 修

2011年、世界の人口は70億人に達しました。
現在のところ、2050年には90億人を超えると予想されています。

これに対し世界の農地面積には限りがあり、世界的な食料不足の懸念を払拭することができません。

この食料不足の問題を解決するためには、農耕地を再び拡大していくか、可能な限りの技術を駆使して、より効率的な農業生産を実現していくか、この2つの選択肢しかありません。

農耕地に関して言えば、増やすどころか年々減少傾向にあるため、私たちにできることは、必然的に効率的な農業生産を目指す道しか残されていないこととなります。



海のない地球の様子 CG

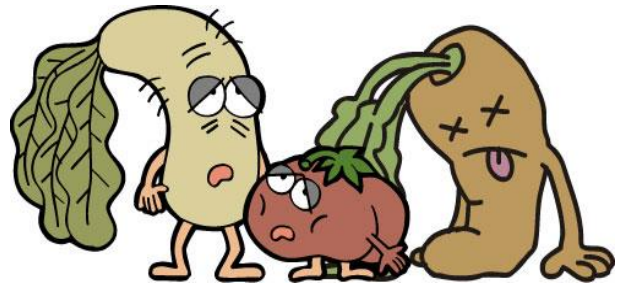
しかし、これは言葉で言うほどたやすい事ではありません。

農産物の生産ロスを減らすための施策としては、従来様々なことに注力してきました。
その一例を次に示します。

- ・病気、害虫、雑草の害を軽減し、作物を健全にする。(農薬)
- ・植物にとって最適な肥料や栄養管理を行う。(肥料)
- ・肥沃で健全な土壌を維持するための土壌改良技術。(土壌改良資材)
- ・人工的気象条件を作る施設。(施設栽培および人工環境制御)
- ・労力軽減のための機械化を進める。(農業機械、農機具)
- ・より多収でストレスに強い品種へ改良、あるいはバイオテクノロジーによる挑戦。(育種、遺伝子技術)
- ・水を効率的に確保する技術。(灌漑技術)

これほど様々な角度から農業生産の効率性を追求してきたにも関わらず、世界的には近年の地球温暖化による異常気象や、無計画な灌漑による塩害や砂漠化など、過去には予測もできなかった未解決の問題が農業生産の効率化を阻んでいます。

農作物は常に外部からのストレスに晒されながら成長を続けていますが、過剰な温度ストレス(高温、低温、霜、凍害)や日照ストレス(低日照、日焼け)により、ごく普通に命に関わるダメージを受けているのです。



その他、水ストレス(乾燥、浸水害、湿害)、塩ストレス(塩害、塩類集積)なども無視することはできません。昨年の北海道の湿害で大きな被害が出たことは記憶に新しいところです。

このような農業をとりまく環境の中で、近年「植物が本来持っている能力を引き出し、植物の活力や収量、品質、収穫後の鮮度保持能などを改善させよう」という技術に注目が集まってきました。

この技術を利用した製品群を「バイオスティミュラント(Biostimulant)」と呼んでいます。

実はバイオスティミュラント自体は、さほど目新しいものではなく、古くから農家が伝統的に使用していた資材も含まれています。

近年の植物生理学の進歩により、ある種の天然素材が植物の環境ストレス耐性を強化することもわかってきました。

その作用機序を再評価することによって、今バイオスティミュラントは大きな注目を集めるようになりました。

長年経験的に使用されている農業資材にも科学のメスが入り、その有効性が証明されてくるケースも見受けられます。

次号より、バイオスティミュラントの定義や種類、効果について、諸外国の動向もご紹介しながら、バイオスティミュラントとは何かを説明していきたいと思います。

どうぞご期待ください。



次号へつづく

5. マルハナバチの利用方針に関する政府の正式発表と助成事業について

アリスタ ライフサイエンス(株) 光畑 雅宏

1. セイヨウオオマルハナバチの出荷数の半減、在来種マルハナバチへの転換について

2017年4月21日に農林水産省と環境省の両省は、予てからの専門家による提案と3月29日までに実施したパブリックコメントの結果を受け、2020年までに特定外来生物種として規制対象となっているセイヨウオオマルハナバチの出荷数量を半減し、在来種マルハナバチへの転換を促進する方針を正式に発表いたしました。

具体的な方針内容は、

- ・ 2020年までにセイヨウオオマルハナバチの出荷数を半減する
- ・ 本州、四国、九州(南西諸島を含む)については、在来種クロマルハナバチに転換すると共に適正な利用方法を啓発する
- ・ 北海道については、クロマルハナバチは利用せず、エゾオオマルハナバチの実用化を目指す

なお、上記の内容は農林水産省、環境省両省のホームページ(下記の URL 参照)にてご確認いただけると同時に、マルハナバチ取り扱い企業(メーカー)はもちろん、施設園芸協会、全野研などの各関係団体に公文書にて通知される予定です。

農林水産省: http://www.maff.go.jp/j/press/seisan/kaki/170421_11.html

環境省: <http://www.env.go.jp/press/103935.html>

2. 在来種マルハナバチの利用拡大支援事業の追加公募につきまして

上記の方針の施策の一つとして農林水産省予算にて実施されます「在来種マルハナバチの利用拡大事業」は2017年3月10日に一旦申請を締め切りましたが、本年5月中旬より3週間の追加公募が行われる旨、農林水産省生産局より連絡が入りました。

在来種マルハナバチへの転換を積極的に取り組んでいただく産地への国の助成制度になります。

- ・ 検討会(説明会)の開催にかかる諸経費の補助
- ・ 先進地視察、講習会の開催、実証・展示圃の設置にかかる借地代や資材費の補助
- ・ クロマルハナバチ製品購入費の半額助成

詳細な事業内容につきましては以下の URL をご参照の上、各県の農政部、地方農政局にお問い合わせください。よろしくお願いいたします。

http://www.maff.go.jp/j/supply/hozyo/seisan/170220_2.html

今後、セイヨウオオマルハナバチ「ナチュポール[®]」をご利用いただいている産地、生産者の皆様(北海道を除く)およびその流通に携わる皆様には、在来種クロマルハナバチ「ナチュポール[®]・ブラック」「ミニポール[®]・ブラック」への転換にご理解とご協力を賜ることが确实となりました。

利用者の皆様が安心して、これまでと変わらず作物受粉にマルハナバチをご利用いただけますよう、説明会の実施、圃場巡回などお手伝いさせていただきます。

また一部の産地、生産者の中には、クロマルハナバチがセイヨウオオマルハナバチよりも活動性が悪いなどの印象をもたれている方もいらっしゃいますが、クロマルハナバチ実用化当初の品質が不安定だった頃のイメージや、クロマルハナバチとセイヨウオオマルハナバチの特性の違いを周知できないまま使われていた頃のイメージによるものです。

クロマルハナバチも販売開始から既に 20 年近い月日が経過し、品質、利用ノウハウなどが発売当時とは比べられないほど向上しています。

現在、弊社における両種の販売比率は半々となっており、クロマルハナバチの特性を理解して使われている生産者様からはセイヨウオオマルハナバチと変わらない非常に高い評価をいただいております。

弊社のクロマルハナバチ製品「ナチュポール[®]・ブラック」ならびに、「ミニポール[®]・ブラック」は、セイヨウオオマルハナバチをお使いの皆様にご不安、ご不便をおかけすることなく、スムーズな利用種転換のお手伝いをさせていただくことができると確信しております。

改めまして、両省より正式発表されました利用方針と助成事業の追加公募につきましてご案内させていただきます。生産者の皆様に説明をさせていただく機会など頂戴できましたら幸いに存じます。



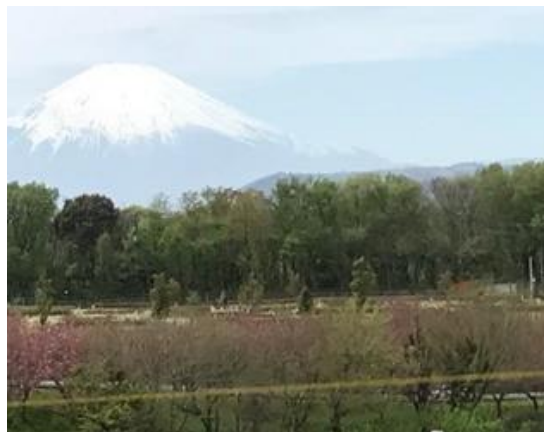
<海外ニュース>

アリスタ ライフサイエンス(株) 技術顧問 和田哲夫

今年はコパート社創立 50 周年とのことで、世界各国での生物防除、天敵利用の歴史と現状について写真集を出版するということになり、オランダより、編集者、カメラマンが 4 月に来日しました。

世界で取材する国は 10 カ国ということで、その中で日本はアジアで一番生物防除、天敵利用が進んでいるということで選ばれました。

日本の前に中国を訪問してきていた取材陣は、中国での生物防除があまり進んでおらず、取材する場所が少ないと残念がっていましたが、日本では、イチゴ、キュウリ、トマトなどの温室での天敵利用の過去と現在を取材できたので、富士山の美しい映像とともに、満足していたようです。



日本以外では、アメリカのカリフォルニアでの野外のイチゴでの天敵利用、メキシコの温室でのマルハナバチ、ブラジルの大農業地帯での微生物資材と有機栽培への取り組み、スペインのネットハウスでのトマトでの天敵利用、アフリカ ケニアでは巨大バラ温室でのカブリダニによるハダニ防除だけでなく、小規模の農家での天敵利用、オランダ、チェコなどでの大型・小型温室での天敵昆虫と微生物農薬利用の発展している状況を見て、各国での IPM の広がり、それらの国々での現場の技術者、生産者のやる気などに強い印象を覚えたとのことでした。

日本では天敵を二世帯にわたって使っている生産者の話や、10a に満たないイチゴ狩りハウスなどに興味をもったようです。



この写真集は 10 月発刊予定となります。



<さいごに>

弊社製品のお問い合わせは、お近くの JA、小売店などをお願いします。

また、弊社開設のホームページにも IPM 関連情報が掲載されていますので、あわせてご覧ください。

(<http://www.arystalifescience.jp/>)

『アристаIPM通信』は、おかげさまで32号となりました。

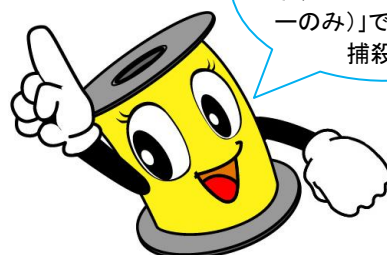
皆様からのご質問、ご意見、ご感想をお待ちしております。

また、今回が初めての配信で、バックナンバーをご希望の方、今後の配信をご希望されない場合も、弊社ホームページよりお問い合わせフォームをお選びの上、お気軽にお送りください。

<http://www.arystalifescience.jp/ipm/ipmtsuushin.php>

次回「アристаIPM通信」33号は、2017年7月の発刊を予定しております。

今後とも弊社製品を宜しく願います。



粘着板 ホリバーに加えて、ロール状の「ホリバーロール(イエローのみ)」でもバッチリ捕殺!

アриста IPM 通信

発行人: マーケティング部 原 荘太
編集責任者: マーケティング部 和田 哲夫
発行者: アриста ライフサイエンス(株)
住 所: 〒104-6591
東京都中央区明石町 8-1
聖路加タワー38F
電 話: 03-3547-4415
発行日: 2017年4月27日

■ 編集後記

ちょうど1年前のアриста IPM 通信第27号に「4月は残酷な季節」と書きましたが、害虫や病原菌にとっては寒い冬から、美味しい若芽が萌え出だして、まさにご馳走だらけの、もっとも幸福な月といえるかもしれません。

バラの新芽にアブラムシが、葉にうどんこ病や黒点病が、4月をまっていたように現れてきます。アブラムシにはオルトラン粒剤を、うどんこ病にも、粒剤があればいいと思っているのは編集子だけでしょうか？

さて、バラだけではなく、天敵だけでは、病害虫は防げません。大発生になったときに、天敵も追いかけて大発生するのですが、それでは作物に被害がでてしまいます。プログラムとして、事前に化学農薬や天敵を配することが IPM と思っています。



編集子哲

【著作権について】

本紙に記載された内容の著作権は特に記されない限りアриста ライフサイエンス(株)に帰属し、記載内容の無断での引用・転載を禁止します。なお本紙の内容を変更することなく、転送その他の方法で配布・周知される場合はこの限りではありません。掲載されている写真(製品外観、天敵、害虫など)の転用をご希望される方は、その旨ご依頼ください。用途や媒体により『写真提供:アриста ライフサイエンス(株)』とのキャプションをお願いすることもございます。